

●文 学

はじめに

2023年1月～12月の「学界展望」文学部門は、昨年に引き続き、広島大学所属教員及び広島大学出身者を中心とするメンバー8名が担当した。この1年間に刊行された単行本を中心に報告することを基本方針とするのは従来通りである。各学会や大学などの研究機関、出版社や書店などのホームページからデータの抽出に努め、なるべく多くの情報を提示できるよう心掛けたが、網羅には程遠く見落としも多かったかもしれない。各分野の執筆者は前回と同じで、次の通り。

はじめに、総記、先秦・漢：	小川恒男（広島大学）
魏・晋・南北朝：	佐藤大志（広島大学）
唐・宋：	陳翀（広島大学）、大井さき（佛教大学）
元・明・清：	川島優子（広島大学）、市瀬信子（福山平成大学）
近現代：	桑島道夫（静岡大学）
日本漢学：	太田亨（広島大学）

それぞれの原稿を小川が取りまとめ、本学会出版委員会での検討を経て全体を整えた。

（小川恒男）

一、総記

「香霧雲鬢湿、清輝玉臂寒」と詠った時、想像の中の妻に杜甫はどのような衣裳を纏わせていたのだろうか。劉永華『イラストと史料で見る 中国の服飾史入門 古代から近現代まで』（古田真一・栗城延江訳、マール社）を参考にすれば、「玉臂寒」という表現が実に巧みだということ視覚的によく理解できるだろう。郭浩・李健明『中国の伝統色 故宮の至宝から読み解く色彩の美』（黒田幸宏訳、鷺野正明監修、翔泳社）もまた眺めているだけで楽しくなる1冊である。時代による差が大きいため、中国語の色彩語は扱いが難しい。本書は中国古典籍から384の色彩語を抽出、整理した上で、故宮博物院の文化財から色見本を作成し添付しており、文学作品に現れる様々な色彩を視覚的に捉えることができる。色名にRGB値が示されパソコン上で容易に再現できるのも面白い。中国の詩文には多くの星宿が描かれる。古代の人々は現在の我々よりも星を真摯に頻繁に見上げたに違いない。大崎正次『中国の星座の歴史』普及版（雄山閣）は星宿の歴史を詳述する。原著は1987年に出版されたが、その普及版が刊行された。馬は月や酒と並んで中国の詩文に豊かさをもたらしてきたと思う。『馬・車馬・騎馬の考古学 東方ユーラシアの馬文化』（諫早直人・向井佑介編、臨川書店）はユーラシア大陸東部における馬文化について、家畜化と飼育、馬にまつわる祭祀、馬車から騎馬、そして馬具と、様々な角度から最新の考古学研究成果に基づき詳細に記述する。

王昌齡が「秦時明月漢時関、万里長征人未還」と詠うように、漢の時代は魏晋南北朝期以降の文学に於いて郷愁に似た感覚とともに懐古される。『多元的中華世界の形成 東アジアの「古代末期」』（佐川英治編、臨川書店）は、おおそ後漢末期から初唐の頃

までを、東アジア全体を視野に取めつつ西洋史における「古代末期」として捉えた場合、「漢文化の継承と変容の時代」であったと再定義できるのではないかという視座からの興味深い論考を幾つか取める。

鄭振鐸『中国俗文学史』（高津孝・李光貞監修翻訳、東方書店）は「所収のおそらく八割の作品が初訳である」ためか、原著が1938年の刊であるにも関わらず、今もその新鮮さを失っていない。ここで言う「俗文学」とは「宮廷など高雅な場で享受される文学でもなく、士大夫に重視された文学」でもないとは著者の言葉である。吉川幸次郎『中国詩史』（高橋和巳編、ちくま学芸文庫）は歴代の代表的な詩人をめぐって書かれた評論を歴史順に編み直し、「中国文学において常に主流・精髓と位置付けられてきた」詩について概観する。1967年に刊行された著作の復刊である。

佐伯孝弘・荒尾禎秀・島田大助・川上陽介・王國良・崔溶澈『東アジアにおける笑話』（文学通信）は中国・朝鮮・日本の笑話を主に取り上げ、それぞれの諸相を検討する。笑いのツボは文化により、言語によりそれぞれ大きく異なるはずだが、漢文笑話という形式が東アジア全域に伝播・発展していく過程は特に興味深い。

『黄泉の国との契約書 東アジアの買地券』（稲田奈津子・王海燕・榊佳子編著、勉誠出版）は中国・朝鮮・日本に残る「買地券」を広く紹介し解説を加える。「買地券」は墓地を購入する際に取り交わされる売買契約書であり、しばしば冥界の神々との契約という形式をとる。六朝志怪の背景を知る上で貴重な資料を提供してくれる。

吉川忠夫『読書漫筆』（法藏館）は中国史学の泰斗の手になる、「解題解説」「書評」「編著序文」など特に書物にまつわる文章を集める。史学だけでなく哲学、文学に関する書物も取り上げるが、これらの文章が優れていることは対象となった書物を自分でも読んでみたくなるということからも明らかだろう。

上にも取り上げたが、2023年も名著の復刊がいくつかあった。ここでは西田太一郎『漢文の語法』（齋藤希史・田口一郎校訂、角川ソフィア文庫）、井波律子『中国文学逍遥1 時をのせて 折々の記』『中国文学逍遥2 汲めど尽きせぬ古典の魅力』（本の泉社）を挙げておく。（小川恒男）

二、先秦・漢

これまで『詩経』は経学、文学、民俗学などの領域から論じられてきたが、陳致『『詩経』の形成 儀礼化から世俗化へ』（湯浅邦弘監修翻訳、湯城吉信・古賀芳枝・草野友子・中村未来訳、東方書店）は新出土文献資料を踏まえた上で、古文字学、音楽考古学などの観点から『詩経』が儀礼化から世俗化へ、規範化から地方化へと変容していくプロセスを明らかにする。さらに検証すべき点を残しているとも考えられるが、今後『詩経』研究に於ける一つの基準になるかもしれない。野間文史『清朝の毛詩研究 馬瑞辰『毛詩傳箋通釋』と胡承珙・陳奐・王引之』（明德出版社）の前半は馬瑞辰『毛詩伝箋通釈』の訓読による訳注を中心とし、後半は王引之『経義述聞』通説上・下の訳注を取める。清朝考証学による『詩経』研究が言語学的アプローチに基づくものであったことが改めてよく分かる。伝統を踏まえた経学からの研究であり、馬瑞辰『毛詩傳箋通

釋』の精緻な読解は必読だろう。『毛詩注疏訳注 小雅（四）』（田中和夫訳注、白帝社）は『毛詩正義』に基づくオーソドックスな訳注である。（一）から（三）までは2010年、13年、19年にそれぞれ既に刊行されている。

中国古代の歌謡は祭祀と儀礼の場で歌われるものもあった。しかし、そのような祭祀と儀礼が実際にどのような場で営まれたのか、実はあまり明らかではない。目黒杏子『漢王朝の祭祀と儀礼の研究』（京都大学学術出版会）は前漢・後漢時代に於ける祭儀の実態を丹念に追い、為政者とその周辺の人々のその時その時の様々な思惑から国家の秩序と安寧をはかる「皇帝」像が次第に形成されていく過程を明らかにする。

鶴間和幸『始皇帝の愛読書 帝王を支えた書物の変遷』（山川出版社）によると秦の始皇帝はかなりの読書家だったらしい。極めて特殊な立場ではあるが、当時の知識人のひとりとしてとらえてみると、始皇帝が書物をどのように読んだのかについて考えることは実に面白い。

また、貝塚茂樹『中国の神話 神々の誕生』（講談社学術文庫）が復刊された。

（小川恒男）

三、魏・晋・南北朝

井上一之『陶淵明集の詩想説理と表現様式』（研文出版）は、陶淵明詩の本質を説理性に求め、その思想内容と表現様式の解明を試みる。本論は三部構成で、第一部は陶淵明詩の思想内容すなわち「理」に関する論考を、第二部・第三部は表現様式及び詩語や修辞に関する論考を収める。序論において、筆者は詩句の類型を叙事句、叙景句、抒情句、説理句の4種に分類し、陶淵明の詩は、叙景句に哲学性や象徴性を与えて説理を強めたり、説理句と抒情句を衝突させて説理を相対化させたりすることで、説理に偏らない理を説く抒情詩として効果的な構造を持つとする。詩篇全体ではなく、その下位分類として詩句ごとに類型を設定して、個々の作品構造を厳密に分析しようとする序論の試みは、陶淵明を契機として中国古典詩における景と理、また情と理との関係を探ろうとするものであり、また四言詩や「辞」などの文学様式や修辞などの「型」の追求からその思想内容へのアプローチを試みる本論の考察は、漢から唐へと各種のジャンルや様式が展開してゆく過渡期としての六朝文学の一端を明らかにする。

大村和人『六朝艶詩研究』（中国文庫）は、楽府「三婦艶」とその母胎となる古辞系模擬作品における同一表現や共通要素の淵源をさぐり、齊梁時代を中心として六朝時代に大量に艶詩が制作された背景とその意義を検討する。第一部では、上記の古辞系模擬作品が『詩経』以降の祭祀詩や宴飲詩の伝統を継承し、家族の幸福とその永続を象徴的に描いたものであること、そしてそれは『詩経』の正雅的世界の実現を目指して儒教と文学の発展を主導した梁の武帝蕭衍らと、王朝への接近をはかる貴族たちによって、国家和合を言祝ぐものとして制作され、齊梁期を代表する作品群の一つとなったことを指摘する。第二部では、その他の艶詩へと考察の対象をひろげ、齊梁期の艶詩が儒教に基づく祭祀と祝祭の伝統を継承、発展するものであると結論づける。当時の人々の風俗の頹廢に由来すると、従来否定的にとらえられてきた艶詩流行の背景に、儒教の伝統を継

承し和合と繁栄を願う国家的な意義を認め、齊梁期の文壇の実態を読みとろうとする本書は、六朝艶詩研究の可能性を示した点において評価できよう。ではその可能性は六朝艶詩研究の内側にとどまるものなのか、それともその外側に開かれるものでもあるのか、今後の展開が待たれる。

『大上正美先生傘寿記念三国志論集』（三国志学会）は、魏晉南北朝期の文学及び『三国志演義』と後世における魏晉南北朝文学の受容に関する論稿を収める。魏晉南北朝期の文学に関する論考には、まず史書を問題とするものとして、柳川順子「曹氏兄弟と魏王朝」と稀代麻也子「沈約『宋書』における二人の文帝—劉義隆と曹丕—」がある。前者は史料の中の曹丕に関する記述及び曹植の作品を通して曹丕と曹植との関係を問い直し、後者は『宋書』の編纂行為から曹魏と劉宋の二人の文帝とその「文」に対する沈約の態度と理解を探る。それぞれ語られる主体と語る主体を対象としつつ、歴史上の人物や事象を語ることを問う。

詩に関する論考は3篇。初海正明「阮籍「詠懐詩」における「自然」—『老子』における「自然」を通じて—」は、「自然」を切り口として阮籍「詠懐詩」における『老子』受容のありかたや阮籍の表現手法を明らかにし、牧角悦子「何劭と張華—暮春をめぐる贈答詩—」は、何劭と張華の贈答詩に託された含意を読みとり、贈答詩という表現形態が持つ伝達と修辭との関係を問う。矢嶋美都子「楽府題の「銅雀妓」「銅雀台」に関する一考察—銅雀の妓の悲しみを中心に—」は、陸機「魏の武帝を弔う文」を契機として作られ始めた楽府題「銅雀妓」「銅雀台」をとりあげ、その背景に齊梁期や初唐期の文人の曹操の能力に対する理解と、銅雀の妓に対する共感とある種の羨望を読みとる。詩に関する3篇の論考は、魏晉から隋唐に向けて文学の主流が賦から詩に移り変わろうとする時期に、詩というジャンルがどのように表現され、機能し、流通していったのかをそれぞれの文脈において問い直す。

一方、賦に関する論考も3篇。鈴木崇義「成公綏の「天地賦」について—魏晉における辞賦文学の側面から—」は、西晋時代における賦のテーマ拡充という問題と関連して成公綏の「天地賦」をとりあげ、山崎藍「顔之推「稽聖賦」小考」は、南北朝末期の顔之推の作と伝えられる「稽聖賦」の基本的な情報と佚文を整理し、その研究の可能性を開こうとする基礎的研究。安藤信廣「庾信の賦の時間表現と語り—「邛竹杖賦」の複数語り手—」は、庾信の後期（西魏・北周時代）の賦のなかで異色な「邛竹杖賦」をとりあげる。明確な他者を対置することで、自己の思考を浮かびあがらせる「竹杖賦」のような問答体に対して、語り手の交代も明瞭ではない曖昧な問答体を用いる「邛竹杖賦」は、喪失者としての自己（＝「杖」を手放す人物）と流浪者としての自己（＝手放された「杖」）を語り手として自立させる。そして、その自己の両面を自立させた語り継ぎのなかで、庾信は自己のあり方を問い直したとみる。激変する時代状況のなかで、他者との対立から自己を立ち上げる主体から、そのような時代状況とは距離をおき、対立の未分化な語り継ぎによって自己を問い直す主体への変容を論じる本論の考察は、庾信文学の問題にとどまらず、様式の変容と主体との関わりという問題についても考えさせる。

（佐藤大志）

四、唐・宋

丸井憲『杜詩雙聲疊韻研究 聯綿語を超えて』（研文出版）は、前著『唐詩韻律論 拗體律詩の系譜』（研文出版）に引き続き、唐詩、特に杜甫詩の韻律を論じる力作である。本書は、清朝の周春が著した『杜詩雙聲疊韻譜括略』に焦点を当て、緒論を含む全11章で構成されている。杜詩の双声疊韻は、長年にわたり杜詩研究の重要課題の一つであり、本書も今後、杜詩の音韻に関わる研究者の必読書となるであろう。

小田健太『李賀詩論』（早稲田大学出版部）は、著者の博士論文「李賀研究」を修正・補完し、さらに補論「杜甫の詩における樹影の表現について」を追加したものである。本書は二部構成で、上篇「表現における試行」では、李賀詩の「落照・飛蛾」「花作骨」「酒闌感覺中區窄」「雁門太守行」の初二句、「碧血」などの詩句や詩語を取り上げ、李賀の詩語の独自運用から詩的素材の自在性までを論じている。下篇「自己表象論」では、李賀の「疾病表現」「年齢表現」「自称表現」「自己認識の変容」を取り上げ、さらに「他者としての李賀」という章を加え、李賀の人生を俯瞰し、その精神世界と文学世界について鋭い見解を提示している。著者は「李賀は特異な詩風の持ち主であるが、彼も文学史上の完全な独行者ではありえない。詩が書き手と読み手を媒介するものである限り、それは過去からの文脈を何らかの形で背負っていると考えなければならない。李賀の表現は、ときにそれらの延長上にあつて安定性を獲得する。またあるときにはあえて反動的に受容したり、意味合いにねじれを加えたりして、独自性を主張する」と述べており、この見解は李賀のみならず、杜甫や李商隠といった独自性の高い他の詩人の研究にも適している。

田口暢穂『白詩逍遙 白樂天の世界に遊ぶ』（研文社）は、長年にわたる白居易の詩語に関する論考をまとめたものである。白居易の「嗟髮落」詩に見られる「髮落」「晚婦府婦」や「偶詠」などの詩に見られる「蕉衣」「蕉衫」（著者はこれを「単衣もの」と称す）、「春末夏初閒遊江郭其二」や「答夢得秋庭獨座見贈」詩に見られる「虫思」、また「霖雨苦多江湖暴漲塊然獨望因題北亭」詩に見られる「黃氣」などの詩語を取り上げ、唐詩におけるこれらの語彙の変遷を丁寧に追いつながり独自の説を構築している。このほか、第六章「講演記録『漢詩を読むということ』」、第七章「『長恨歌』私注稿」を収める。本書は、「白樂天詩の奥深さを知る」ことのできる1冊である。

なお、本年度に出版された訳注書には、大東文化大学東洋研究所出版の『藝文類聚（巻五十一）訓讀付索引』（『藝文類聚』研究班編）、『天文要録』の考索〔四〕（小林春樹編集代表）、『茶譜』巻十三注釈（藏中しのぶ編著）の3種のほか、川合康三『杜甫下』（新釈漢文大系詩人編7、明治書院）、二宮俊博『津阪東陽『杜律詳解』全釈』（上中下巻3冊セット、二宮印刷工房）がある。特に後の2種はいずれも杜甫と関連する訳注書である。川合康三著『杜甫下』は、2023年に出版された『杜甫上』の続編であり、「人間杜甫から表現者杜甫へ。読みの転換によって表現する、詩的世界の無限の可能性」という視点から、成都時期から杜甫の最期までの詩作を選訳して解説を行う。二宮俊博『津阪東陽『杜律詳解』全釈』は、2020年に同工房が印刷した試行本に誤記訂

正・叙述補正などを行い、新たに組み直して刊行したものである。竹村則行が寄せた「校正メモ」には、「中国・日本の杜詩注釈史や日本漢学史上における注目すべき今日の学術成果である」として、その学術的価値を高く評価している。

そのほか、赤井益久『漢詩をよむ 人生をたたえる詩 白居易の生き方』（NHK 出版）は、著者が『NHK カルチャーラジオ 漢詩をよむ』（2023年10月から2024年3月、ラジオ第2放送）で講義した内容をテキスト化したものである。全五章から成り、「栄光と挫折を味わった詩人・白居易。その作品に込められた心象を鑑賞する」ことを主題とした講義である。一般の読者（受講者）だけでなく、白居易研究者にも示唆に富む内容で、研究と教育の両面において参考となる。（陳翀）

宋代文学に関する専著の出版は少数であったが、各書に共通する点として、時代や地域、研究分野を跨いだ幅の広さが挙げられる。

宋代史研究会編『宋元明士大夫と文化変容』（汲古書院）は、宋代史研究会研究報告の第12集として刊行された。哲学、歴史学、文学を専門とする研究者による論文8篇、翻訳2篇が収録されている。文学分野の論文は、早川太基「「琴」における亡国一毛敏仲と宋末元初の社会」と井口千雪「馮夢龍三言に見る武官の表象」の2篇であり、音楽家と武官という非士大夫層、前言の言葉を借りれば「士大夫の周縁」にある存在を通して当時の社会を見つめる。他6篇もみな分野を横断する要素を持っており、文学研究と密接に関わる内容が多く見られる。例えば梅村尚樹「魏了翁の記—南宋社会における記の位置づけ—」では、記が執筆される経緯や、執筆依頼から校正、刻石までの過程が具体的に示され、そうした背景が記述内容や表現に影響するさまも見て取れる。また、童永昌著、山口智哉訳「笑って何が悪いのか？—戯謔文化の宋代における継承と受容」は、文学の重要な要素の一つである笑いやユーモアを扱うが、分野にとらわれない幅広い視点から、この営みに対する士大夫たちの見解とその変遷を論じる。全体として、文学研究者に多くの示唆を与える1冊といえるだろう。

塚本嘉壽『異常心理学からみた北宋婉約詞—納蘭性徳、歐陽修、秦觀、李清照、晏殊』（文藝春秋企画出版部）は、筆者の専門分野である異常心理学の観点から、北宋を中心とした詞人の作を分析する。時代や地域を越えて人間が共通に持ちうる心の動きを鍵として、日本や西洋の文学との関連にも考察をめぐらせており、広い視野で文学を考えていく手法として興味深い。

学術雑誌では、第10集を迎えた日本宋代文学会の学会誌『日本宋代文学会報』について特記しておきたい。記念号として発行され、全10篇の研究成果が収録された濃厚な1冊となっている。内容は、蘇軾や陸游ら特定の文人の文学を追究するものから、題画詩、書簡など一つのジャンルに対して考察を加えるもの、宋代の著作の日本における受容を検討したものまで、多岐に渉る。加えて、「海外の宋代文学研究動態」を紹介する特別企画の第二弾として、「台湾の研究者による近三十年間（一九九〇～二〇一七）の宋詩研究の概況」（鍾曉峰原著、奥野新太郎訳）も収録されている。

訳注では、日本漢詩文学会編『朱子絶句全訳注』（汲古書院）の第6冊が刊行された。第1冊（1991年出版）の解説にいう通り、思想家として名高い朱子の文学的側面に着

目し、その全体像に迫ろうとするものである。

(大井さき)

五、元・明・清

〈戯曲・小説〉

デジタル化の波は、21世紀以降、加速度的に大きくなるとなり、私たちの日常をのみ込んだ。データベースは言わずもがな、論文の多くがオンラインで公開され、各国の図書館・研究機関に所蔵される書籍の画像データ公開も急速に進んでいる。今や現地に足を運ばずとも、パソコンの前で世界中の論文や貴重書を閲覧し、世界中の研究者と議論を交わすことができるようになった。こうしたデジタル化の波は、「中国古典小説研究の在り方をどう変えるのか、あるいは変えないのか」、荒木達雄編『なぜ古い本を網羅的に調べる必要があるのか 漢籍デジタル化公開と中国古典小説研究の展開』（文学通信）は、コロナの最中に開催されたオンラインシンポジウムを書籍化したもので、古い本（本書では主に『水滸伝』）を網羅的に調べることによって何が見えてくるのか、漢籍のデジタル化公開やデータベースの整備によって何がどうもたらされたのか、各方面からその意味と課題が示される。たとえば、本書の編者でもある荒木達雄氏によれば、「東京大学アジア研究図書館デジタルコレクション」内に設けられた「水滸伝コレクション」では、（本シンポジウム開催時現在）5点の「水滸伝」の版本が公開されており、うち2点が二十五巻嵌図本である。二十五巻嵌図本はドイツにも3点所蔵され、いずれも画像公開されている。これらをパソコン上で比べてみると、風格はよく似ているものの、大きく二つのグループに分かれることが一目でわかるという。以前は、版本の所在を知り、現地に赴いて閲覧し、コピーを手に入れるのに、人脈、時間、資金が必要であった。これらを持つ者のみに開かれていた狭い道が、デジタル化によって大きく開かれたことを、荒木氏は示す。

本シンポジウムのコメンテーターの一人でもある中原理恵氏の『百二十回本『水滸傳』の研究』（汲古書院）は、『水滸伝』の版本の中でも広く流通し、かなりの点数が世界各地に現存しているがためにかえってあまり研究が進んでいない百二十回本について、実に56部を実見調査し（目録で存在が確認できるものがさらに13種あり、その他の情報もあるという）、似たような版本を細かく見比べた上でその全貌を明らかにしたものである。画像データの公開が進んだとはいえ、版本研究においては紙質の違いやわずかなズレなど現物を調査しなくてはわからないことも少なくない。本書でも、たとえば芥子園刊本では料紙に特色が見られ、小さめの料紙が貼り合わされて1枚になっていることがままた確認できることが指摘されている。百二十回本は日本でも流行し、我が国における『水滸伝』の受容を考える上でも重要なテキストである。本研究によって、「従来軽々しく言及できなかった百二十回本について、確かな事実に基づいて議論できるようになった」ことは、まさしく「『水滸伝』研究における福音といっても過言ではない」（小松謙氏の序文による）。

なお『水滸伝』については、引き続き小松謙『詳注全訳水滸伝』（第4巻、汲古書院）が刊行された。小松謙『ビギナーズ・クラシックス 中国の古典 水滸伝』（角川文庫）

では、『水滸伝』を隅から隅まで読み込んだ小松氏だからこそ、の視点で、その魅力が語られる。

明清時代の様々な資料については、デジタル化が進んだこともあり、かつては存在が知られていなかった、あるいは知られていても容易には見られなかったものを見ることができるようになった。これまでの常識、定説についても、見直されるべき時が来たのである。廣澤裕介『明代白話小説の出版—短篇集『古今小説』と「三言」』（汲古書院）は、その目的を、「百年前に提出された諸説を検証し、発展させ、次なる課題を提示することである。一言でいえば、各版本とその相互関係、出版に関与した人物に対する考え方を百年ぶりに更新することである」と設定し、明代白話小説の出版やその発展過程の実像に迫ることを目指す。たとえば従来、『喻世明言』＝『古今小説』とされ、『警世通言』『醒世恆言』と合わせた「三言」はいずれも馮夢龍の編とされてきた。しかし本書は、『古今小説』の序文を書いた緑天館主人なる人物を手がかりに、様々な資料を用いて丁寧に再検討を加えることで、その定説に異を唱えるとともに、こうした出版物が刊行された当時の状況を一つ一つ明かしていく。

『水滸伝』にせよ、「三言」にせよ、その出版には馮夢龍が関わっている。彼の手になる四十回本『平妖伝』については、堀誠『中国通俗小説故事論考—『平妖伝』とその周辺』（研文出版）に詳しい。科挙の受験生でもあった馮夢龍は、一方で受験参考書の類も手がけている。実際、万暦年間には受験生向けの模範答案集や八股文選本等が盛んに印刷され、一大マーケットとなっていた。鶴成久章『明代儒教思想の研究—陽明学・科挙・書院』（研文出版）は、明代の科挙について、その制度や書院に、陽明学の視点から詳細な考察を加えたものである。馮夢龍の『古今譚概』や『笑府』あるいは「三言」でも、受験生をネタにした話は少なからず見られるが、本書の第一部第四章「明代の読書人と科挙—科挙制度における理想と現実」では、万暦44年の科場案を通して、当時の読書人たちの現実が浮き彫りにされている。科挙と出版もまた切り離せない問題である。

明末に起きた「メディア革命」は、それまでには考えられなかったような大量の情報を人々にもたらした。「情報は思考や行動を変え、生活や人生を変える。出版物はそうした情報を運び、ふとした偶然で社会を変え、新しい時代を到来させることもある」（廣澤氏前掲書による）。私たちもまた、メディア革命によるパラダイムシフトの只中にいる。明清時代の文学は、「いま」と「これから」を考えるうえでも大きな意味を持ちうるのかもしれない。

（川島優子）

〈詩文〉

2023年度も、元明清の詩文に関する専著は刊行されなかった。

一方、元明清の詩文を含む碩学の書籍が復刊された。吉川幸次郎『中国詩史』（高橋和巳編、ちくま学芸文庫）である。先秦から近代にわたる中国詩に説き及び、元明清については、先立つ時代の何を引き継ぎ、新しさはどこか、という指摘をしつつ論じている。これは、元明清の詩文を読み解くには、先行する時代の詩文を理解していなければならないことを示していよう。中国文学の歴史の中で、詩文は正統であり続け、また先

の時代を尊重し踏まえる形で歩んできた。このことが、長い歴史の後に立つ元明清の詩文の研究を困難なものにしており、近年このジャンルの専著が生まれにくい要因もここにあるだろう。川合康三氏の解説には、「かくも広い範囲に説き及ぶことは、今日では誰しもできはしないし、今後もあり得ないだろう」とある。この言葉は、とりわけ元明清詩文の研究にとって重いものである。

また、辜承堯『風雅孤高の文芸者 青木正児の構築した中国学の世界』（東方書店）は、中国学の碩学である青木正児についての考察である。第四章「創見に満ちた文学史」では、中国文学に関する三部作『支那文学概説』『支那文学思想史』『清代文学評論史』をとりあげているが、中国文学を広く見渡す中に、清代文学への強い関心があったことが窺える。辜氏は、清代の神韻派・格調派・性霊派という詩派の別が六朝からの「意理」か「文辞」かの議論の延長にある、という分析が、青木の新見解であるとするが、六朝の詩論から清代詩論までの関連を読み解く学問の広さは誰にでも可能なものではないことを、これも示している。

かくも広い範囲に説き及ぶことが、今後あり得ないとするなら、今の我々は元明清詩文の研究にどう取り組んでゆくべきなのか。

そうした中で、元明清詩文へのアプローチを考えさせる著作が刊行された。宋代史研究会編『宋元明士大夫と文化変容』（汲古書院）である。宋代を起点とする文化的変遷を明らかにし、その中で宋代を捉え直そうという試みの成果をまとめたもので、歴史のみならず哲学・文学にも及ぶ。宋代以降の時代を、宋を起点に捉えるという試みは、元明清研究の一つの方向を示している。つまり、元明清に先立つ時代の研究者達こそが、先立つ時代を起点として、その連続性として元明清を見通すことで、新たな元明清詩文研究の担い手となりうるのではないか、ということである。

論文の中にもそうした可能性を感じさせるものがあった。林香奈「黄遵憲の日本漢詩評について一「養浩堂詩集」を中心に」（京都府立大学学術報告「人文」第75号）である。清末の詩人黄遵憲が日本人漢詩集に寄せた詩評について論じたものであるが、詩界革命の先駆者が、『文選』、李白、杜甫など「王道の古典」を尊重し、古意古趣を重んじたという指摘は興味深い。著者の林氏は六朝の研究者でもあり、古い時代の詩を理解していてこそ、その連続性として、清末詩人の中にある古典の意味を正しく捉えられるのだろう。

一人の吉川幸次郎、青木正児を現代に求めることは不可能である。しかし、先行する各時代の研究者達が時代の連続性の先にあるものとして元明清を研究することで、知の集合体として元明清詩文に迫ることはできる。ここに今後の元明清詩文の研究の可能性があるのであるだろうか。

更に、川合康三氏は、詩歌を作者個人の心情に直結させる吉川の解釈に対し、詩を享受する人々が作っている共同体のなかで把握すべきではないか、と問題提起している（『中国詩史』解説）。『宋元明士大夫と文化変容』でも、宋代以降の文学は創作者、受容者が士大夫から非士大夫層へと拡大していく過程であるという点を研究の視座として挙げている。こうした、階層や受容者という新たな視点を加えることで、元明清詩文の研

究は、更に発展する可能性を秘めていると言える。

(市瀬信子)

六、近現代

神谷まりこ『野蛮な文明—近代上海の通俗メディアと社会小説』(中国文庫)は、清末民初、出版メディアの中心地上海で新聞や雑誌の形で発表され流行した通俗小説(いわゆる「鴛鴦胡蝶派」)を取り上げ、従来の批判的文脈から距離を置いて虚心に読み込むことによって再評価を試みている。従来の民国期通俗文学研究は「深度」において(魯迅を初めとする)新文学に遠く及ばないことを疑っておらず、雑なジャンル定義や『紅樓夢』『金瓶梅』の延長として捉えるようなアバウトな通史的研究も散見されるが、神谷氏はそうした研究のあり方に異議を唱える。社会小説を生み出す同時代の様々な言説(横のつながり)や近代活字メディアの発展がもたらした新しい環境のなかで捉え直すべきではないか、と。第一部「メディアと作家」では職業作家を成り立たせた近代メディアや個々の作品読解を通して浮かび上がるモダニティの諸相が、また第二部「女性像—ジェンダーとセクシャリティ」は道德の荒廃と拜金主義をもたらした「文明」を「野蛮」と見なす男性作者のミソジニーの内実が通底する問題関心となっている。殊に興味深いのは後者だろう。神谷氏はミソジニーを男性作者たちの守旧意識というより、過渡期の読者の幻想や不安をすくい取ろうとした結果と見ている。そのような読者と等身大の創作のあり方が“文以載道”のもとで書かれたものとは異なる人物像の多面性をもたらしたのだ、と。これはこれで紛れもなく近代的な作家のありようと言え、つまりは彼らが潔く思想性を放棄したことで、作品は時代を映し出す鏡となったのである。

高文軍『郁達夫 文学の青春—大正期名古屋における中国人留学生の足跡』(朋友書店)は、副題が示すとおり郁達夫の名古屋時代の足跡を、彼の日記や漢詩、あるいは名古屋を舞台とした小説を参照し、史料や実地検証で裏づけながらたどったものである。こうした研究は稲葉昭二『郁達夫—その青春と詩』等日本人研究者による業績がすでにあるが、本書は郁達夫の若き日の“心路歷程”に、より広範な史料に基づいて迫ろうとしている。中国の一昔前の郁達夫研究は作者に寄り添わないものが多かったが、本書を読んで隔世の感がある。

河本美紀『張愛玲の映画史—上海・香港から米国・台湾・シンガポール・日本まで』(関西学院大学出版会)は、従来ほとんど顧みられなかった張愛玲の映画脚本家としての側面や渡米後の文学営為に焦点を当てた画期的論考である。河本氏は張愛玲の映画脚本の一次資料に直接当たり、張愛玲がモデルにした脚本がある場合はその先行する脚本との比較を通して張愛玲の脚本の特徴やオリジナリティを論じている。そうした過程から浮かび上がるのはペシズムに彩られた張愛玲小説とは対照的な軽さだが、中には映画脚本と小説に共通する視点もあり、非常に興味深く読んだ。いずれにせよ、本書によって広義の意味での張愛玲文学の違った一面を垣間見ることができた。なお、香港において北京語映画の制作が盛んであった時期があったことはあまり知られていない。本書は香港映画史研究の空白を埋める意味でも価値ある業績と言える。

垂水千恵『台湾文学というポリフォニー—往還する日台の想像力』(岩波書店)は、

たとえば日本統治時代の台湾人日本語プロレタリア作家楊逵における、日本の植民地体制に抵抗しつつ、その抵抗を日本語で作品化することの葛藤とその矛盾を打破するために日本のプロレタリア作家と連帯せざるを得ない内実が明らかにされる。それは確かに昨今の台湾親日言説が蔓延している日本において我々が忘れてはならない視点であろう。本書に一貫する意図は日台の作家の相互表象の非対称性をあぶりだすことにある。ただ、第11章「反射し合う『日本記憶』—『路』と『海角七号』」では、吉田修一『路』において「日本を許してくれる台湾」というある意味無責任な台湾・ドリームが描かれる一方、魏徳聖『海角七号』において台湾はその包容力によって日本を庇護する存在として描かれるという一見奇妙な一致の背後に、日本<台湾という権力関係の逆転が生じていることを指摘している。日台それぞれに考えさせられる現象である。

注目すべき翻訳は、中国のものとしては王安憶『長恨歌』（飯塚容訳、アストラハウス）、閻連科『四書』（桑島道夫訳、岩波書店）、同『中国のはなし』（飯塚容訳、河出書房新社）、普玄『痛むだろう、指が』（倉持リツコ訳、勉誠出版）、陳春成『夜の潜水艦』（大久保洋子訳、アストラハウス）等が挙げられる。殊に『長恨歌』は1940年代～80年代上海を舞台に、路地裏に生まれた美しい少女の40年にわたる浮き沈み激しい人生が描かれた王安憶の代表作である。また閻連科『四書』は毛沢東の主導で始められた大躍進運動とその副作用としてもたらされた大飢饉を時代背景とし、黄河のほとりにある知識人を思想改造するための収容所を舞台として、旧訳聖書（の文体）を織り交ぜながら飢餓地獄が語られる。フランツ・カフカ賞を受賞した閻連科の代表作である。彼の最新作『中国のはなし』では、改革から取り残された田舎町一家の互いへの一息子から父親への、父親から母親への、母親から息子への一「殺意」を通して中国の暗部が照らし出される。

また台湾・マレーシアのものとしては陳耀昌『フォルモサの涙—獅頭社戦役』（下村作次郎訳、東方書店）、賀淑芳『アミナ』（マレーシア、及川茜訳、白水社）、甘耀明『真の人間になる』（白水紀子訳、白水社）、陳思宏『亡霊の地』（三須祐介訳、早川書房）、王元『君のために鐘は鳴る』（マレーシア、玉田誠訳、文藝春秋）、陳又津『靈界通信』（明田川聡士訳、あるむ）等が挙げられる。殊に『フォルモサの涙』は1874年、日本が台湾に出兵した牡丹社事件を描く。また『真の人間になる』は1945年9月、戦後の混乱のなかで起こった三叉山事件を描く。『君のために鐘は鳴る』は第七回金車・島田荘司推理小説賞受賞作。（桑島道夫）

七、日本漢学

平安朝期の漢学作品に対する解説書として、柳澤良一『本朝麗藻詳注 上・下』（勉誠社）が刊行された。寛弘年間に編纂された漢詩文集『本朝麗藻』の訳注書であり、作品の背景、漢詩文の構成や平仄、漢語の「語性」について解説する。研究書としては、川上萌実『懐風藻の詩と文』（汲古書院）が刊行された。本書では、詩語・人物伝・序と書名に着目し、それぞれの問題点を解決することで『懐風藻』の編纂意図の一端を明らかにする。

以下、時代順に取り上げる。中世の日本漢学に関する研究には、館隆志『鎌倉時代禅僧喫茶史料集成』（勉誠社）がある。鎌倉時代の禅僧の史料（禅語録・清規・著述・文書等）に見られる喫茶関係の記事を抽出し、書き下し・現代語訳・注を施す。椎名宏雄『宋元版禅籍の文献史的研究』第一巻（臨川書店）は、伝記・系譜、燈史、清規、綱要に関する種々の禅籍について、宋元版と五山版の書誌事項を精査・解説する。杵掛良彦『表現者としての一休「恋法師一休」の艶詩・愛の詩を読む』（研文出版）は、一休宗純の詩偈集『狂雲集』から気になる詩・偈頌を取り上げ、これまでの一休研究における様々な議論・解釈を踏まえ、自身の卓見を披露する。とりわけ柳田聖山氏の一休論に対する批評が興味深い。勉誠社編集部編『禅寺の学問 相国寺・両足院の知の体系』（書物学22巻、勉誠出版）は、相国寺と両足院の諸文献・諸美術についての論考を収める。楊昆鵬『詩歌交響 和漢聯句のことばと連想』（臨川書店）は、和漢聯句作品を詩歌の表現・題材や連想方法に重きを置いて丁寧に読解し、漢詩文の受容の様相や、和歌と漢詩が折衝し融合する過程の実態や独自性を明らかにしている。題材やテーマ毎に繰り広げられる著者の読解と卓見は、これまでの和漢聯句研究を新たな段階へ発展させている。

近世の日本漢学では、石運『十七・十八世紀の日本儒学と明清考証学』（ペリカン社）があり、日本の十七・十八世紀における朱子学から古義学、さらに折衷学へと移行する過程が、中国の朱子学の衰退から明清考証学の発展の過程と軌を一にしていることから、「共時化」によるものとする。今野真二『江戸の知をよむ 古典中国からの離脱と近代日本の始まり』（河出書房新社）は、日本語学者として高名な著者が、様々な観点から江戸時代の人々が中国古典から離脱しながら、新たな知を形成していく様子を描く。杉下元明『比較文学としての江戸漢詩』（汲古書院）では、江戸時代において中国の漢詩文がどのように受容されたのか、日本の偉人や出来事が漢詩文でどのように詠まれたのか、日本漢文学が地方へどのように浸透したのかに論及する。村山敬三『藍澤南城の学問と教育』（汲古書院）では、藍澤南城が残した詩文集・経書の注釈書等を丹念に調査し、当時の社会状況、その人生と人物交流、経書への注釈態度、詩文の特徴、私塾における教育と門人等について詳細に論じる。直井文子『日本漢文学の江戸後期 知識人の自己表現』（汲古書院）では、江戸後期の齋藤拙堂・頼山陽・頼春水・頼杏坪の漢詩文を取り上げ、作者がどのように思索し、どのように自己を表現していたか検討する。個人個人の作品の特徴、思考の相違について論じ、四者のつながりについても明らかにする。

近代の漢学研究では、牧角悦子・鈴置拓也編『三島毅『中洲文稿』』（研文出版）が、『平賀中南『春秋集箋』』（2017年）『川田剛『甕江文稿』』（2020年）に引き続き、近代日本漢籍影印叢書の一書として刊行された。三島中洲は漢学塾二松学舎を創設し、漢学復興を唱えた人物である。靳春雨『中国・日本の詩と詞—『燕喜詞』研究と日本人の詩詞受容』（朋友書店）では、別集『燕喜詞』について論じた後、日中における『詞綜』の所蔵状況と、日本の山口剛や佐藤一斎が詞籍をどのように受容し、どのように詞を詠じたかについて論じる。合山林太郎編『大沼枕山と永井荷風「下谷叢話」—新視点・新資料から考える幕末明治期の漢詩と近代—』（汲古書院）では、第一部に「大沼枕山をめぐる詩と交友」に関する論考、第二部に『下谷叢話』に関する論考、第三部に近年に

見つかった枕山の新資料に関する分析、整理が収められる。

最後に日本漢文学について通史的に述べた研究を取り上げる。本間洋一『詩人たちの運命 漢詩夢想』（和泉書院）では、古代から近世にかけて、平城天皇・大江匡房・藤原忠通・藤原頼長・信西・雪村友梅・新井白石等が漢詩を通じて、自身の境遇をいかに詠んでいるか、丁寧な読解と著者の感懐を合わせて分かりやすく解説する。佐藤道生『日本人の読書 古代・中世の学問を探る』（勉誠社）は、古代から中世にかけての「日本人の読書」をテーマにして論じた書である。読書史が「証本の書写」と「訓説の伝授」とが繰り返されることによって展開したとし、当時の学問・漢学の資料から、種々の問題を取り上げ、漢籍受容の実態を明らかにする。時代は平安時代から江戸時代にかけて、取り上げた書物は『和漢朗詠集』『論語』『文選』『春秋』『孝経』等、多岐にわたる。

（太田亨）